

三木 栄博士の〔朝鮮医学史及疾病史〕中の歯学記事

今 田 見 信 (抄)

1. 朝鮮医学史 (159 頁)

成宗時代 (高麗後紀—1470年～1494年の25年間)

「^{るいじゅ}医方類聚」30の刊行,「郷薬本草」の改訂,「医門精要」50巻,「救急簡易方」9巻9冊などが撰出された時代で,明医方が普及し,医学水準の高まった時代で,その23年(1493年)に『済州医女張徳能人歯虫を去る,凡そ病瘡^{るいじゅ}処皆な之を去る. 將に死せんとしてその術を私婢貴今に伝う。

国家贖ひて女医となし, 広くその術を使えんと欲す. 2女医をして従行せしむ, 貴今秘して伝えず, 貴今を拷して之を問はん^{るいじゅ}と欲す, 貴今日く我7歳より始めてこの術を学ぶ, 16歳に至りて乃ちなる, 今われ心をつくさざるに非らざるなり, 之を教えても彼れ習う能わざるのみ』という。

2. 同書 399頁—400頁に,「東医宝鑑」外形篇巻の2に耳科, 鼻科, 咽喉科, 口舌科の概要を紹介し, その口舌科を次の如く述べている。

口舌科では口舌門と牙齒門とがあげられている。

口舌門には, (1)口曰玉地 玉地は清水を靈根に灌ぐとある. すなわち玉地とは口, 清水は津液, 靈根とは舌のことである. (2)口唇属脾 脾気は口に通ず, 脾和すれば舌能く5味を知る. (3)口舌主5味 口酸, 口苦, 口甘, 口鹹, (4)口舌の生理作用を説き, ついで口臭, 口糜, 唇腫唇瘡, 齲唇, 舌腫, 重舌, 木舌, 舌衄, 舌長舌短, 舌上生苔, 舌生芒刺, 失欠脱頰, 自齧舌頰, 口流涎, 口噤不開, 小兒口舌瘡, 酒客喉舌生瘡, 諸虫入口などの症状, 治法を列載し, 診法として脈法と視唇舌占病を述べ, 更に一般治療法と鍼灸法を掲げる。

<牙齒門>

高麗時代の「郷薬救急方」と, 李初期の「郷薬集成方」に歯の部のあることを紹介し, また「太平聖恵方」にくわしく記述されていることを説いている (同書参照)

3. 同疾病史 6頁では,「三国史記」に竜齒湯の記載あることを紹介し,「竜齒湯とは竜齒 (神農本草經)にみえ,「千金方」,「千金翼方」,「外台秘要方」にも引用してある) は前生期象類の歯の化石で, 成分は主として磷酸カルシウムである。

正倉院にも現蔵されていることを指摘している。

4. 同書 疾病史の7頁には「郷薬救急方」の17項に重舌, 口瘡, 重舌. 18項に齲齒並に齒痛をあげている。

5. 同疾病史の120頁には第15節として口歯病を掲げ, 第1項に口腔病, 第2項に歯病を掲げている。

付・平安朝時代の交易

平安朝における薬物の需要関係は, 遣唐使は停廃されたが, 交易を目的とする商船の往来は継続せられ, それを通じて唐物がもたらされた. 日常医療に使用する薬物中, わが国に全然生産のないもの, あるいは代替を許さない性質のものは, 唐船の舶載に俟たねばならなかった. また天台, 真言の仏教の加持祈祷に用いる香薬を必要とし, その香薬は医療の薬物を兼ねたものであるもので, それを求める要望は強く, かつ舶載品の売却には利益を伴うので, これを目的とする唐の商船は引き続いて来日し, 各種の薬物香料をもたらしたのであった. わが国で生育し難い薬草. 薬樹類. 邦産のない動物. 鉱物性の薬品は, このような商人によってもたらされた. その寄航地は九州の松浦, 荒津等の港であった. (山田平太)